

「今金男しゃく」産地形成の経緯

(一社) 北海道地域農業研究所 顧問
(公財) 北農会農業技術コンサルタントチーム 前代表幹事

とみた よしあき
富田 義昭

1 はじめに

今金町は北海道の道南で、行政区域は檜山振興局管内の北部に位置し、日本海に面する瀬棚町と太平洋（内浦湾）に面する渡島振興局管内の八雲町と長万部町に隣接している。また、狩場山地（狩場山1,520m）を境に後志総合振興局管内の島牧村が隣接している。日本海沿岸の瀬棚町はかつてニシン漁場で本州との交易が行われるなど、開拓の歴史が古く、今金町は瀬棚港から移民した人達による開拓が始まった。

気候は温暖であるが、日本海からの強い偏西風が雪や雨をもたらし、一方、太平洋（内浦湾）で発生する濃霧の影響を受けるなど、気象の変化で農作物の影響を受けることがしばしばある。三方向に連なる大小の山岳のため河川が多く、中でも後志利別川は清流日本一に幾度も選ばれている。交通面では瀬棚からの海運で本州との交易が発達した。しかし、陸路は、道都（札幌）に繋がる国道5号線と鉄路の函館本線国縫駅（長万部町）から分岐し今金・瀬棚に通じる瀬棚線の開通は困難を極めた。それは、美利河峠（ピリカ）と花石峠のトンネル掘削と、河川が多いため橋梁の設置に多くの日時を要し、今金には1930（昭和5）年に、瀬棚には1932（昭和7）年に瀬棚線（48.4km）がようやく開通した。道路も同様な立地条

件のため開削が困難で開通が遅れた。なお、JR瀬棚線は、1987（昭和62）年3月廃止となった。

2 今金町の初期の農業

開拓当時の農業は、瀬棚の海岸から入地した人達が自給自足の生活から始まり、大小の河川流域の平たん地は水田が開かれた。傾斜地は丘陵・高台地の開墾により、酪農や畑作農業が行われた。畑作地帯の土壌は表層腐植質黒ボク土、褐色森林土、灰色台地土、褐色・灰色低地土などが3,000ha余が分布しており、いわゆる白土系土壌が広く分布し、馬鈴しょの肌がきれいである。

稲作が不安定な時代の畑作物は稲黍、稗、馬鈴しょ、玉蜀黍、蕎麦などであるが、換金するには輸送網の整備が十分でなかったため、菜種が換金作物として栽培され瀬棚港から船で越後（新潟）方面へ移出されていた。その他、麦類、豆類などが栽培され換金・販売作物とし栽培が行なわれた。馬鈴しょは大量の貯蔵が困難であり、「でん粉」に製造して貯蔵・輸送に堪える農産物となった。

3 馬鈴しょ栽培の足どりの概要

今金町は「男爵薯」の北海道産トップ銘柄

柄産地の名を馳せている。その歴史記録については、北海道教育大学岩見沢校社会研究室ゼミナール論集（2000年度）にまとめられている。第一期は1891～1929（明治24～昭和4）年で、自家食料やでん粉製造が主であった。第二期は1930～1952（昭和5～27）年とし、1930（昭和5）年、国鉄瀬棚線開通を機に鉄道貨物による本州への輸送が開始された。男爵薯、紅丸、メイクイン、蝦夷錦の4品種に限定したが、男爵薯を重点に、種いもを本州のみならず、満州国にも出荷された。第三期は1953（昭和28）年～現在とし、栽培は「男爵薯」に統一した。それに準拠した栽培技術で食用いもが生産され、集出荷・選別施設の設置と整備を行い、周辺の瀬棚町などを含め白土地帯として一定量まとまった産地規模があり、安定した産地として継続している。なお、移出用種いもは2010（平成22）年に生産・販売を中止し、地場で使用する種いものみとなった。

1）第一期は1891～1929（明治24～昭和4）年

檜山地方は、瀬棚町の漁場で馬鈴しょが栽培されたのが北海道で最初だとされているが、それが定着したのではない。厚沢部町、江差町とその周辺地域は「メイクイン」産地。今金町、瀬棚町とその周辺地域は「男爵薯」産地として発展した。

今金町の馬鈴しょは1891（明治24）年が最初だとの記録がある。気候や土壌条件から栽培適地であったことから、明治末期には農作物生産高のトップの位置づけになった。1900（明治33）年から水力によるでん粉加工が始まり、1907（明治40）年から

1912（大正元）年には工場を持つ生産者が増え、製造高が増し、安定した農産物の道が開けた。さらに、1914（大正3）年からの第一次世界大戦で好景気となり、北海道は豆成金、でん粉成金が続出し、でん粉工場が乱立した。しかし、1919（大正8）年に大戦が終わり一転して不況に陥り、でん粉業の廃業、転業が行われた。

このような背景の中で、北海道内では鉄道の利用による食用馬鈴しょや種馬鈴しょの生産が始まっている、今金町では1915（大正4）年から金原農場で種馬鈴しょの試作を行ったと記録されている。1928（昭和3）年の「男爵薯」が優良品種になり、道外への販路拡大の基礎になった。

2）第二期は1930～1952（昭和5～27）年

この期は、第二次世界大戦前後の混乱期であり、国民の食料不足の中で、生産資材が十分に得られず、農村の若者が兵役に駆り出され労働力不足などで農業生産力が低下した。馬鈴しょの「萎縮病（ウイルス病）」と「疫病」が発生し、農業試験場から原種の供給が途絶えるなど種いもの生産体制が整っていなかった。

北海道では1936（昭和11）年、「種子馬鈴薯圃場審査規定」北海道告示990号による道営検査（北海道農産物検査所）が施行されることになり、日本における圃場検査の先駆けとなった。当時の移・輸出量は、1940（昭和15）年の3.8万tに対して、1943（昭和18）年には10万tを超えた。検査合格の種いもが不足し、食用いもから1.2万t充当したと記録されている。品種は「男爵薯」が90%を占め「メイクイン」、「蝦夷錦」、「ペポー」などである。でん粉用

いもの「紅丸」が国内はもとより満州などが大量に移出され、北海道の馬鈴しょの位置づけ確立された時期である。

しかし、原採種体系が軌道に乗らなかった。終戦後GHQ（連合国最高司令官総司令部）からの勧奨により、1947（昭和22）年、国による馬鈴薯原種農場が開設され、さらに、1950（昭和25）年には、「植物防疫法」による種いも検査制度が制定され、原採種体系が確立し、生産性の向上が図られた。なお、戦後「輪腐病＝リングロット」が発生するなど新たな問題がおき、防除対策に10年余の歳月を要した。

一方、馬鈴しょが国内の食料としての重要性から、戦時中から国の食料統制品目になっていたが、1950（昭和25）年統制解除になった。また、国の支配による農業会が戦後、農業協同組合の民主的組織になるなど、改革が行われた。

食糧需給の緩和により、種いもの供給過剰の時代を迎え、生産調整を余儀なくされ食用いもへの転換が行われた。北海道内ではこのような歴史的背景の中で食用いもが産地形成された地域が多い。しかし、人手

による収穫、馬車による運搬の時代が続いた（写真1、2）。

今金町の馬鈴しょはこのような歴史の中で、種いも産地を堅持しつつ、食用いもに転換した農家は、種いも栽培と同じ技術水準を維持したことに大きな特徴がる。

3）第三期は1953（昭和28）年～2000（平成12）年

食料統制撤廃後の新生農協の販売事業は商人との競争の中で進められた。馬鈴しょの品種を、1953（昭和28）年に「男爵薯」に統一し、銘柄維持のため、しっかりした生産基盤の中で、しかも、周辺の瀬棚町などを含め白土地帯として一定量のまとまった産地規模となり、安定した産地として販売体制を確立している。

この期の初めごろ、熱心な販売活動の一端として、品質にこだわり、自信をもって農業協同組合理事者（曾我井組合長）のトップセールスは有名で、市場でのトップ銘柄の伝統維持を誇りとしている。1967（昭和42）年、種いも生産と食用いもの生産農家を区別しており、当時の作付面積は254haで5,500 t の生産量であった。なお、2017（平



写真1 収穫は手かごにて拾い集め1 t 程度の山に体積し、藁をかけて風乾し、荒選別して出荷する。こうした手作業は、昭和30年代まで続いた（「今金男しゃく」GI登録についての資料より）。



写真2 農家から集出荷場までと、貨車積みまでは馬車による運搬だった。この様な作業は、昭和40年代まで続き、その後トラクタや自動車に変わった（今金町史より）。

成29) 年は面積375ha (内種いもは68ha)、12,000 t と 2 倍以上の生産量となっている。この期になってから農家からの集荷、倉庫への搬入・貯蔵、選別機へ移動はコンテナやフォークリフトの利用により省力となった (写真3)。



写真3 コンテナとフォークリフトの普及により、ほ場から、集出荷場への運搬、貯蔵庫での保管、選別ラインへの送り込みが機械化された。なお、「トレーサビリティ」システムから、生産者の情報が追跡できるようになった。

4) 2000 (平成12) 年以降の姿

2002 (平成14) 年、馬鈴しょ低温貯蔵施設の設置、バラ積からコンテナ積に変わり、選別機の導入、2008 (平成18) 年空洞センサーなどの施設を完備した。それらに伴い、2005 (平成17) 年に「今金だんしゃくマーク」の商標登録を受けており、2018 (平成30) 年には「今金男しゃく」地域団体商標登録をうけ、さらに2019 (令和元) 年9月には「地理的表示 (GI) 保護制度」登録を受け不動の産地となった。なお、GI登録は北海道内では夕張メロン、十勝帯広川西長いものに続き3番目である。また、2015 (平成27) 年には、ポテトチップスのメーカーが「今金男しゃく」のブランドを冠したポテトチップスを地域・期間限定で売り

出している。なお、名称を「今金男しゃく」に統一した (写真4)。



写真4 「今金男しゃく」と名称統一を行い。平成17年「商標登録」、平成30年「地域団体商標登録」、を経て令和元年「地理的 (GI) 表示登録」を受けた。

4 「今金男しゃく」の心得六カ条

今金ものがたりに示された、職人の心得六カ条は。①健全に育った作物こそが「安全・安心・美味しい」(作物の本来持っている生産力を最大限発揮させる)、②生育を均一にすることに意義がある (未熟・過熟を作らない、でん粉価13.5%キープ)、③妥協を許さない生産体系 (巡回を行い不適切なもの「病株等」は全て除いている)、④職人にはプライドがある (近所の職人と味・品質を比較し競争している)、⑤職人の結束力・良い作物作するという意識はこの産地にも負けません (結果、全ての農作物で各方面から高評価を得ている)、⑥北海道の中でも芋作りには最適な風土を持っている (寒暖の差が激しくホクホク感、甘味が最高)。

5 「今金男しゃく」の光と影

歴史と伝統により「今金男しゃく」を築き上げた産地であり、数々の栄光の部分は

評価できる。しかし影の部分のあることにも触れておかなければならない。

一つ目は、男爵薯は「ジャガイモシストセンチュウ」抵抗性が無いことである。今後「男爵薯」を作り続けることができるかの懸念に対して、発生状況や実害の観察を行うとともに、抵抗性品種の導入を模索しておかなければならないと思う。

今金町の近年の作付け状況を見ると、令和元年の畑地面積は、水田からの転換畑を含め約3,800haであり、小麦、大・小豆、馬鈴しょが1,393haであり、草地を除く輪作畑の主力品目である。てん菜は128ha、野菜が109haとなっており、野菜はハウス栽培を除き、露地のダイコン、ニンジンなどが輪作体系に含まれる。馬鈴しょの作付面積は371ha（内、種子馬鈴薯は80ha）となっている。種いもは4年以上の輪作が義務付けされているが、食用いもも4年輪作を取り入れ過作を避けている。

今金町では、酪農や黒毛和牛の飼養も行われているので、耕畜連携による畑地としての活用や有機物の有効利用による土壌管理と輪作を含めた対策が必要である。

上記のような懸念に対し正面から受け止め、論議を交わし将来に対す基本的な方向付けを行って欲しいと思う。なお、発生圃場は限定されており、抵抗性品種を導入している。

二つ目は、北海道全体の課題であるが、今金町も例外ではない。それは物流（輸送）の課題である。「今金男しゃく」の輸送は

トラック・トレーラーが65%であり、一部区間（函館～青森はフェリー）を除き、消費地までの長距離の陸送である。JRコンテナは25%であるが、これも函館のJR貨物ターミナルまではトラックでの輸送が伴うので、トラックドライバーの不足が現実となり、運送経費の増加になっている。また、JR貨物は、新幹線の札幌延伸に向けて、青函トンネル内貨物との共用区間の走行時間の短縮のため、貨物の輸送力の減少の影響が懸念される。

筆者は、知人の普及員OBから紹介推薦により、1996（平成8）年2月、今金町農業確立対策協議会の主催による、農業委員会・農協・土地改良区役員合同の講演会に招かれ「これからの農業経営の戦略と野菜生産・流通の現状と将来展望」について講演を行った。また、その後全員による懇談会で意見交換を行った。関係機関のリーダーが一堂に会する研修と懇談会は珍しく、印象深く心に残っている（写真5）。



写真5 今金町農業確立対策協議会主催による「講演会」後の懇談会（平成8年2月）。